市民リポーターだより No.4

「大館地方3D（スリーディー）調査」にみる住民意識

リポーター
豊口 一 さん
（旭ケ丘）

大館青年会議所（戸田直人理事長）の大館らしさ委員会（小池昌平委員長）が今年四、五月に大館らしさとは何かを探ろうという趣旨のもと、地元住民（大館市・田代町・比内町）、圏外者、圏域への転入者を対象にアンケート調査を行いました。

その中の地元住民の調査結果を報告します。なお、紙面の都合上、詳細なデータを載せることができませんでした。詳しく知りたいかたは大館青年会議所事務局（☎49－5140）までご連絡ください。

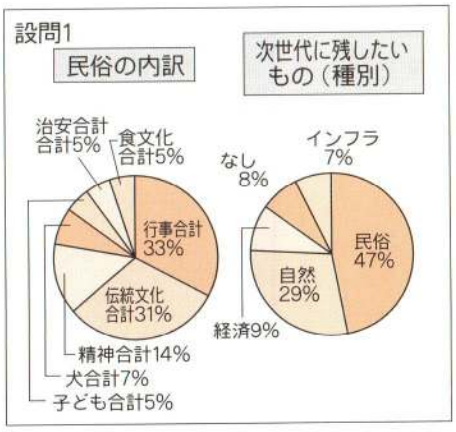
設問1 次世代に残したいもの、こと

「ない」の回答が一割を占めた。自然環境に回答が比較的集中したのは「自然以外に思い当たらない」ということだと考えられる。行事を挙げた回答は比較的多かったが、内訳としては各集落の伝統行事であり、特定行事への集中は認められなかった。

そのほかは特徴的なものは見当たらない。転入者、圏外者ともに重視されていた「きりたんぽ」は一件「曲げわっぱ」にいたっては回答ゼロだった。

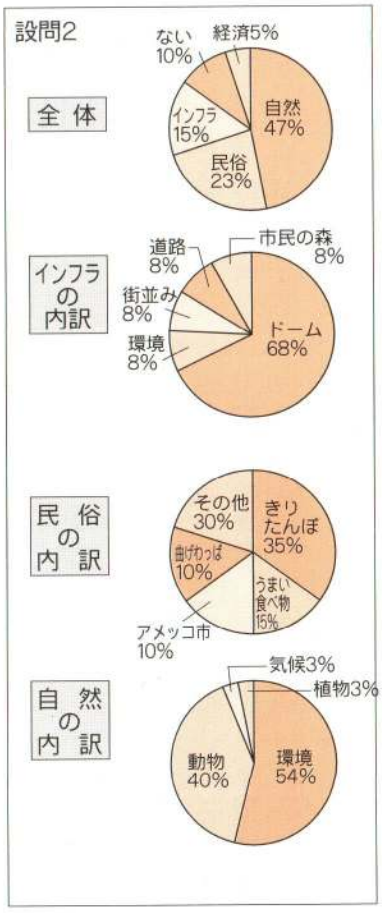
農業を残すという意見は、当初の予想をはるかに下回った。

行事については、地域（集落単位など）でそれぞれ独自性があり、まとまらなかったと考えられる。総じて、地域に対する「統一感」「こだわり」「愛着」といったものが希薄であるようにみえる。



設問2 他地域に対して誇れるもの、こと

設問1とほぼ同じ傾向。項目別にみると「自然」関係が最も多いが、次いで「なし」がつけている。ドームが「なし」と同数で二位。転入者、圏外者ともドームの回答が少なかったことを考えると地元住民の過大評価とも取れる。「きりたんぽ」が三位。温泉を挙げるひとが一人しかいないのも特徴的。

「温泉」は日常的なもので特別意識する存在ではない。行事関係で目立つのは、転入者との意識のズレ。総じて「自分の地域に優しくない」という傾向がみられる。地元に対して非常に冷めているし、愛着も希薄。「どうせこんな地域」という住民感情が見て取れる。

設問1は地域生活に必要なもの、設問2は客観的に見て特徴的なものを探ろうという質問設定だった。1と2を比べると、自然と民俗の価値観が逆転することが分かる。ここで暮らす人たちには伝統文化が必要だが、これらの伝統は他所に誇れるようなものではないとい